

## 啐啄同時

### 1. 教育を考える一言

「啐啄同時」<sup>そつたくどうじ</sup>（碧巖録）

### 2. 背景

中国古典の、禪の世界の言葉です。卵の中の雛鳥が殻を破ってまさに生まれ出ようとする時、卵の殻を内側からつつくことが「啐」、そしてちょうどその時、親鳥が外から卵の殻をコツコツとつつくのが「啄」です。両方が一致して雛が生まれる「機を得て両者相応じる得難い好機」について表した言葉として「啐啄同時」とあります。親鳥の啄が一瞬でもあやまると中のヒナ鳥の命があぶない、早くてもいけない、遅くてもいけない、その間合いの絶妙さを突いた言葉です。師匠と弟子、教師と生徒の関係になぞらえて読み解くことができ、教職にあるものに対して大いに示唆を与えてくれる言葉であると感じ、大切に心に留めています。

### 3. 考察

この言葉は、前任校の会議室に掛かっていた額に大書されていました。達筆な筆書きで、読めもせず、意味も皆目見当がつかなかった言葉でしたが、とある先輩教員から意味を教えてくださいました。生徒たちひとりひとりにそれぞれ、殻を破って出てくる時機があること、それに時機を捉えて応えられれば必ず心が開けること、焦らず、また投げ出さず、地に足の着いた教員の指導のあり方を優しく論してもらっているように感じました。

新米教員だった十余年前、生徒指導でのトラブルや学級経営上の問題について色々と突き当たり悩んでいた時、同僚の先輩方に個別に相談に乗っていただいていたのがその会議室でした。会議室の雰囲気、空気感とともに、その当時を思い出す言葉となりました。

いま、教師と学校を取り巻く現実が大きく転換しつつあります。いじめ、不登校、学校の安全等々、解決しなければならぬ喫緊の課題が山積しています。個々の教員の責任はどんどんと重くなり、多忙化・疲弊化も相当進んでいます。しかし、現場の個々の教員には誰しも、「想い」や「誇り」を持ち、初めての教壇に立った経験があるはずです。学校の現場には、教員の中からも「啐」の状況があるのではないかと思います。

学校を変えるためには、また、学校が変わっていくためには、個々の教員のそういった「想い」とともに、制度、組織としての面からのエンパワーメントが当然必要になってくるはずです。私たちスクールミドルの世代が、次に続く世代に上手に橋渡しをしていかねばなりません。県教委より大学院に派遣いただいた機会を、大切にしたいと思っています。

### 引用参考文献

入矢義高、末木文美士、溝口雄三、伊藤文生校注『碧巖録（上・中・下）』岩波文庫、1997